

⑫ 実用新案公報 (Y2) 昭 56-40432

⑬ Int.Cl.³
A 61 F 5/01識別記号
6404-4 C

⑭ ⑮ 公告 昭和 56 年(1981)9 月 21 日

(全 3 頁)

⑯ 鎖骨骨折固定帯

⑰ 実願 昭 54-135711
 ⑲ 出願 昭 54(1979)9 月 30 日
 ⑳ 公開 昭 56-53410
 ㉑ ㉒ 考案者 久保 善規
 青梅市河辺町 1-895
 ㉓ ㉔ 出願人 株式会社 東京衛材研究所
 東京都墨田区京島 1 丁目 21 番 10 号
 ㉕ ㉖ 代理 人 弁理士 飯塚 誠厚

㉗ 実用新案登録請求の範囲

肩の背面から胸部前方の鎖骨部をその曲線に沿うてかつ脇下を通過して固定するようにした鎖骨骨折固定帯において、その要部の肩先下方に上腕部巻着帯を、またその肩背面部に別に設けた短冊状背当ての上部締め金に挿通する帯を、またその脇下通過部に同短冊状背当ての下部締め金に挿通する帯をそれぞれ設け、該上腕部巻着帯の一端部裏面および上下締め金挿通部の端部表面にそれぞれ面ファスナーを縫着した鎖骨骨折固定帯を左右対称に設け、その中枢に前記上下締め金付き短冊状背当てを配置し、該背当ては適当な軟質抗張材を芯材としてこれをデニムなどのクッション性生地でカバーした鎖骨骨折固定用帶。

考案の詳細な説明

この考案は鎖骨骨折の治療の際非観血的に処置する方法として使用される鎖骨骨折固定帯に関し、使用中、ずれを起こしたり、局部的に余分な圧迫を与えることなく確実な固定を可能にした鎖骨骨折固定帯に関するものである。

一般に鎖骨骨折は骨折全体の 10~15% を占め、また年令的な面においても乳幼児から老人まで幅広く発生する疾患である。さらにこの疾患は鎖骨下動脈の損傷、腕神経叢麻痺偽、関節の形成等の疾

患をも誘発する危険があり、確実で安全性の高い鎖骨骨折固定帯が望まれていた。

従来、鎖骨骨折の非観血的治療には、さらし、弾力包帯、紺創膏等を用いて患部を 8 字型に固定していた。しかしながら、これらの固定材料はその装着が技術的に困難であり、使いこなすには熟練を要した。また一方ギブス包帯のような固定材料の使用は重くて患者には苦痛であった。ところでこのような問題を解決しようとして実開昭 50-34288、同 51-13994、同 53-43781、同 54-66691 等の考案が出現した。しかし、実開昭 50-34288、同 54-66691 のものは装着が容易で手軽に使用出来る反面、鎖骨骨折部位を確実に固定するという機能面に欠け、装着中に固定位置がずれてしまつたり、脇下を圧迫して装着が苦痛であるという欠点がある。また実開昭 51-13994、実開昭 53-43781 のものは、胴ベルトや胸ベルトを付設した点で装着中の固定位置がずれてしまつたり、また脇下を圧迫することは軽減されたが、装着が複雑になり、装着方法を誤つたり、装着後の固定調節がうまく出来ないという欠点があり、さらに胴ベルトや胸ベルトで腹部や胸を圧迫するため、長時間の装着は息苦しくなつたり、気持悪くなつたりして事実上の使用に適しない欠点がある。

この考案は以上のような欠点を克服して簡単に装着でき、鎖骨骨折患者が安心してしかも長期間ずれや苦痛を起こさず安易に使用出来る鎖骨骨折固定帯を提供するものである。以下実施例図に基づいて説明する。

図中 1 は肩の背面から胸部前方の鎖骨部および脇下をその曲線に沿うて固定するようにした鎖骨骨折固定帯の要部、2 は該要部の肩先相当部、3 は該肩先相当部から下方に向けて付設した上腕部巻着帯、4 は該要部の肩背面部、5 は別に設けた短冊状背当て、6 は該背当ての表面上方部に縫着した締め金、7 は要部の肩背面部に設けた上記締め金 6 に対する挿通部、8 は要部 1 に縫合した脇下通過

部、9は短冊状背当て5の表面下方部に縫着した締め金、10は脇下通過部8に設けた上記締め金9に対する挿通帯、11は上腕部巻着帶3の一端部裏面に縫着した面ファスナー、12は上部締め金挿通帯7の端部表面に縫着した面ファスナー、13は下部締め金挿通帯10の端部表面に縫着した面ファスナー、14は前記要部1における肩背面部4と脇下通過部8との縫合部、15は背当ての締め金縫着に使用した綿ベルト片である。そしてこの考案は以上のように構成した鎖骨骨折固定帯を左右対称に設けてその中枢に図示の如く短冊状背当て5を配置したものである。なおこの鎖骨骨折固定帯は面ファスナーの固定に適する比較的部厚で柔軟なそして肌ざわりの良いふつくらした生地を縁取りしてつくつたものである。また背当て5は図示しないがポリエチレン発泡体とポリウレタン発泡体を貼り合せてつくつた軟質抗張材を芯に組み込み、これをデニムなどの丈夫な綾織り綿布のクッション材でガーバーしたもので強い抗張力を有し、しかも肌ざわりの良いのが特徴である。次にこの考案の使用方法を説明する。

先ず背当て5の左右側部に対設した各鎖骨骨折固定帯(以下同じ)の肩背面部4,4に設けた締め金挿通帯7,7の各端部をそれぞれ短冊状背当て5の上部締め金6に挿通、折り返して該端部の面ファスナー12,12で背当て5に仮固定する。次に背当て5を患者の背柱に位置させ、要部1,1をそれぞれ患者の両肩に沿うて胸部前方の両鎖骨部に当たがい、脇下通過部8,8を身体に沿いつつ各脇下を通過させてその締め金挿通帯10,10を背部に回わすとともに各その端部を短冊状背当て5の下部締め金9に挿通、折り返して該端部の面ファスナー13,13で背当て5に仮固定する。次に仮固定した肩背面部の締め金挿通帯7,7の各端部および脇下通過部の締め金挿通帯10,10の各端部の締め加減を再調整して全体を身体によくフィットさせる。さらに上腕部巻着帶3,3を各上腕部に巻着しその一端部を面ファスナー13,13で他端部に固定し、全体の装着を完了する。そしてその装着状態を図示すると第2,3図のとおりである。

この考案は叙上のように、すなわち肩の背面から胸部前方の鎖骨部をその曲線に沿うてかつ脇下を通過して固定するようにした鎖骨骨折固定帯において、その要部1の肩先2下方に上腕部巻着帶

3を、またその肩背面部4に別に設けた短冊状背当て5の上部締め金6に挿通する帶7を、またその脇下通過部8に同短冊状背当て5の下部締め金9に挿通する帶10をそれぞれ形成し、該上腕部巻着帶3の一端部裏面および上下締め金挿通帯7,10の端部表面にそれぞれ面ファスナー11,12,13を縫着した鎖骨骨折固定帯を左右対称に設け、その中枢に前記上下締め金6,9付き短冊状背当て5を配置し、該背当て5は適当な軟質抗張材を芯材としてこれをデニムなどのクッション性生地でガーバーした鎖骨骨折固定帯であるから、およそのような作用、効果を有するものである。

すなわち要部1,1および背当て5の構造において装着および調整が容易であり、また要部肩先2,15 2に各成形した上腕部巻着帶3,3の対上腕部巻着作用により要部1,1が肩峰突起骨より離れて固定力が減少することを防止し、なお上腕部巻着帶3,3は、脇下通過部8,8に結合されておらず腕の運動を束縛しないため日常生活に影響がない。また要部の締め金挿通帯7,7および脇下通過部の締め金挿通帯10,10は短冊状背当て5の上下締め金6,9を通して固定されるから、前掲考案類の如く胸部や胸部にベルトを付ける必要がなく、したがつて装着中の圧迫による苦痛を伴わない。さらには脇下通過部8,8の締め金挿通帯10,10の各端部は、背当て5における肩背面部4,4締め金挿通帯7,7の上部締め金6の位置より約10cm下位の下部締め金9において固定されるため、その固定曲線は緩やかとなり脇下部を圧迫しない。なお上下締め金6,9は強い抗張力をもつた短冊状背当て5に綿ベルト片15,15により固く縫着されているため両締め金6,9の位置関係は常に一定しており、したがつて上記締め金挿通帯7,7,10,10等の装着曲線に変動がなく、長期間装着しても脇下への圧迫を起こさない等従来品にない特殊の作用効果を奏するものである。

図面の簡単な説明

添付図面はこの考案の実施例を示し、第1図は背斜視図、第2図は装着状態の背面図、第3図は同正面図である。

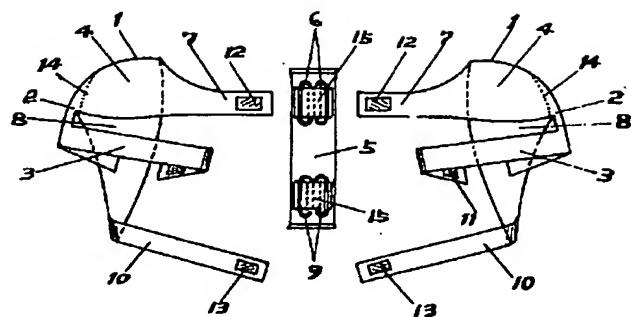
1……固定帶要部、2……要部の肩先、3……上腕部巻着帶、4……要部の肩背面、5……短冊状背当て、6……背当て上部の締め金、7……上部締め金挿通帯、8……脇下通過部、9……背当て下部締め金、

5

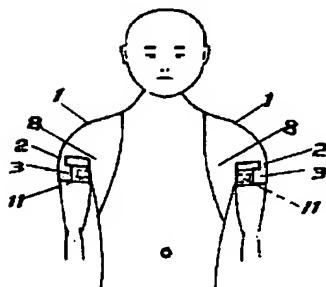
6

10……下部締め金棒通体、11,12,13……面フアス ナー。

第1図



第3図



第2図

